

序

経緯

このローマ字テキストの原本は、パリアジア協会蔵の紙写本 no. 2 (略号: P3)¹である。ユジェーヌ・ビュルヌフ (Eugène Burnouf, 1801–1852) は、この写本を底本として、世界初の近代語訳となるフランス語訳を完成した²。戸田宏文 (1936–2003) は以前からこの事実に関心を抱き、P3 のローマ字化実現とフランス語訳を検討する必要性を力説していた。しかし、晩年はネパール系諸写本の読解とそれらのグループ分けの作業に全精力を注いでいたために、この方面の研究に十分な時間を割り振ることが困難な状況であった。

筆者は、1996–99年にかけて戸田宏文の指導の下で『東京大学総合図書館蔵梵文法華経写本 (No. 414)』(T8, 2003年上梓) のローマ字化の作業を進めながら、戸田のこのような切迫感を肌で感じていた。やがて筆者は、そうした雰囲気の中で、戸田との折々の会話をとおして、I. ネパール系紙写本のグループ分けと、II. ビュルヌフのフランス語訳の検討という二つの課題は、彼が筆者に与えた暗黙の指示である、と確信するようになった。

こうした経緯から筆者は、これら二つの課題を本書の序に採用することにした。I の課題については、戸田の研究成果を土台に、筆者の紙写本のローマ字化作業の過程で明らかになってきた情報をできるだけ明快に伝えたい。II の課題は、ひじょうに浩瀚な内容となるだろうし、筆者にとっても数年の短期間で完了できる作業ではない。また、その成果も、本書のローマ字テキストと共に一巻の書に収録できる分量をはるかに超えるであろう。しかも、筆者はその端緒を開いたばかりである。これらの事情を勘案して、筆者は、これまでに検討をすませたなかのごく一部を記述することで、本書の序としての体裁を整え、読者諸賢のご寛恕を請うものである。これによって、「歴史的人物 (personnalités historiques)³」に列せられたビュルヌフのフランス語訳の内容の一端を具体的に明らかにできれば、本書の序の意図は十分に達せられたと考える。

I. ネパール系紙写本のグループ分けについて

この課題についてはこれまで度々、戸田が遺した業績を紹介するかたちで論じてきた⁴。ネパール系写本のなかに占める P3 の位置を確認するためには、まず梵文法華経写本略号一

覧に列挙された貝葉写本と紙写本のグループ分けをできるだけ明確に整理しておく必要がある。この作業は、それぞれの写本について、各章ごとに、段落ごとに具体的に行うことが必要であるが、現時点で、その作業がすべて完了したとは言えない。しかし、戸田の長年の努力の結果集積された具体的な情報と、それらの整理・分類の作業を通して、写本のグループ分けについてのかかなり具体的な事実があきらかになった。それらの情報は、ネパール系写本読解のためのよき道しるべである。現在のところ、ネパール系写本は、次のように整理して、それぞれのグループに分類することができる⁵。

貝葉写本群 (西暦11世紀-13世紀頃)

- (1) C3, C4, Pe, N1;
- (2) B, C6, T6, T7, N2;
- (3) C5;
- (4) K;
- (5) N3;
- (6) T2

これらの写本の中では、(1) が、ネパール系写本の最古層の読みを比較的良く保存していると考えられる。この読みは、ギルギット写本との類似性が高く⁶、チベット語訳との関連が指摘される⁷。また、(2) の諸写本は、戸田が日常的に「B系」と呼んでいた⁸グループに属する。(3), (4), (5), (6) は、それらの帰属が、最古層のグループや「B系」と完全に一致すると断言できない写本である。

紙写本群 (西暦17世紀-20世紀頃?)

- (1) A1;
- (2) A2, A3;
- (3) T8, P3;
- (4) C1, C2;
- (5) R, T9;
- (6) T4, T5;
- (7) P1, P2;
- (8) T3;
- (9) W;
- (10) StP

これらの紙写本で、書写年が分かっているのは⁹、A1 (西暦1679/1680年), A2 (西暦1711/1712年), R (西暦1801/1802年), T4 (西暦1805/1806年), P2 (西暦1826/1827年) である。

(1) は、おおむね「B系」の流れをくむ紙写本とみて大過ない¹⁰。したがって、この紙写本は、「B系」に属するある貝葉写本を忠実に書写する意図をもって、書き写された紙写本で

あると言える。T8 は、貝葉写本 N3 の読みを忠実に写した紙写本である¹¹が、N3 は、テキスト全体の半分以上が散逸しているのもので、その失われた箇所を紙写本で補っている。ところで、アーシャー古文書館 (ネパール、カトマンズ) に保管されている 5 枚の貝葉写本は、N3 の一部であることに間違いはない¹²。

P3 は、序品と方便品では (2) の読み近く、その後 N3, T8 の読みとよく合致するようになり、Kn 256.7¹³ を境に N3, T8 を離れて、再び (2) のグループに移行していく¹⁴。したがって、ビュルヌフのフランス語訳の底本となった P3 は、T8 の双子として、貝葉写本 N3 の読みを保存しながら、それ以外の箇所は (2) の読みと類似する紙写本であるといえる。奥書に書写年や書写生の名が記されていないが、A2 の書写年の西暦 1711/1712 年より後の 18 世紀中に書写されたと考えられる。P3 の読みの所属グループを章別に列挙すれば、ほぼ下記のごとくになる。なお、下記の記号 = は、*s / ś, m / ṃ, -ṃ ca / -ñ ca* などの表記上の違いを無視すれば、ほぼ同じ読みを共有していることを示し、≐ は、まれに誤写か誤伝と考えられる語句や、ヴィサルガやサンディの表記などに異同が認められるものの、写本の所属グループという視点からは、互いに同じ系統に属していることを示している。

第1章-第2章 (Kn 1.5-59.7) = A2, A3 ≐ R, T9; T4, T5

第3章-第11章 (Kn 60.1-256.6) = N3, T8 ≐ A2, A3; C1, C2; R, T9; T4, T5

第11章-第27章 (Kn 256.7-487.9) = A2, A3 ≐ N3, T8; C1, C2; R, T9; T4, T5

(4) の書写年代も不明だが、筆者は、(2) から (5) までの時期に書写されたと考えている。しかし、(3) と (4) のどちらが先に書写されたかは、現時点では分からない。(4) は、序品の読みが貝葉写本の Pe に合うことが知られている¹⁵が、全体的には、(2) に類似しているのもので、結果として (3), (5), (6) の読みと類似する。ここで、戸田の言う「R 系」¹⁶ について補足を加えれば、R, T9, T4, T5 の四本の紙写本は、一つの強固なグループを形成してはいるが、R, T9; T4, T5 すなわち、(5) と (6) は完全には一致しない。これは、(5) と (6) の二組の写本の書写年に 4 年という時間的なズレがある。(6) は (5) を忠実に書写しようとしながらも、それを無批判に受け入れたのではない。当然のことではあるが、厳格に校正作業が行われた結果、両者に若干の異同が生じたと思われる。

このように、T8 を除く (2) から (6) までの写本は、紙写本独特の読みを共有する大集団を形成している。

(7) の P1 と P2 は貝葉写本 T2 の流れをくむ紙写本であり、たがいによく合致する双子のコピーである¹⁷。これらの双子のコピーは、書写時期に若干の時間的なズレはあったとしても、ほぼ同時進行で 2 本ずつワンセットとして書写されたのではないかと思われる。(2), (3), (4), (5), (6), (7) は、こうして産まれた双子の写本姉妹であると考えられる。本稿で筆者は、こうした写本の「双子説」を提唱したい。したがって、A1 と T3 にもそれぞれ双子の姉か妹が存在するはずだと期待してもよいだろう。(9) の W に関しては、その保管場所が不明であるため、何とも言えない。(10) の StP は未公開の貝葉写本の写しで、何かの必要に

迫られて急いで乱雑に書写された単独のコピーであると考えられる、ひじょうに新しい写本で、確証はないが筆者には 20 世紀初頭に書写されたのではないかとさえ思われる。その読みは貝葉写本 K や「B 系」写本に類似する所もあるが、詳細な比定は今後の作業である。戸田によれば、この紙写本はチベットに所蔵される未発表の貝葉写本のコピーであるらしい¹⁸。

これらの結果をまとめると、紙写本は、次の3種類に区分できる。

- ① (1), (10) のように、全体が貝葉写本の写しと考えられるもの。
- ② (3), (4), (7), (8) のように、貝葉写本の写しではあるが、その欠損箇所を (2) に起源を持つ紙写本の読みで補ったもの。
- ③ (2) と「R 系」すなわち (5), (6) のように、全体が紙写本の特徴を示す読みを保つもの。

以上の①②③のなかで、③が、紙写本としての読みの特徴をもっともよく示している。とはいっても、その出発点は貝葉写本である。書写生たちが作業の出発の時点で、どの貝葉写本を書写の原本に選んだかという選択が紙写本の性格をほぼ決定づけたと考えられる。彼らは、書写や校正作業の段階で、理解困難な語彙や表現、異読に遭遇する度に、その処理や異読の取捨選択に苦慮し、原本とした写本以外の、参照可能な貝葉写本を参照し、あらゆる視点から検討を加え、議論し、悩み、決断して、妥当と考える一つの読みを採用したにちがいない。そこでは書写生の仏教学の知識や語学的センスもおおいに影響を与えただろう。そうした努力の過程で徐々に紙写本独自の読みが熟成されていったと考えられる¹⁹。

紙写本群の読みを検討した結果、筆者は、梵文法華経ネパール系紙写本の出発点は (2) であると確信するようになった。これを土台にして、その後の紙写本が書写されていったと考えられる。(2) のうちで、書写年が記されている A2 が、紙写本群の根源となった写本であり、A3 はその双子のコピーである。したがって、A2 のローマ字テキストの出版は、紙写本群を総括するために逸することのできない作業行程である。

II. ビュルヌフのフランス語訳 (*Le Lotus de la bonne loi*, Paris 1852) の検討

読者諸賢は、次の二点を念頭に、以下の論考を読みたい。

(i) ビュルヌフは、フコー (Philippe Édouard Foucaux, 1811–1894) の協力を得て、法華経のチベット語訳を参照しながら、P3 をフランス語に訳出し1839年に完成させた (1841年印刷完了)。

(ii) その後、三本の紙写本 (P1, P2, R) を参照しながらフランス語の訳文の是非を検討した。その経緯を記録したものが訳注 (notes) である。フランス語訳テキストは、彼の死去 (1852年5月28日) 後まもなく出版された (1852年10月6日付けの序文)²⁰。

サンプル 1 第 1 章 偈 7 (Kn 9.9–10)

P3 は、この箇所をつぎのように読んでいる。(folio 6b3–4)

(下線は筆者、梵文とチベット文はイタリック体で記した。以下同様)

buddhā(m)ś ca paśyāmi narêndrasimhā(m) prakāśayanto vicaranta dharmmān |*
prāsvāsamānā *bahusatvakoṭī udārahanto madhurasvarāṅ giram* ||*

ネパール系諸写本には、下線部分について次の三つの異読がみられる。(現在分詞の語尾変化の異同は、当面の考察に影響を与えないので無視する)

- ① *prakāśamānā* D1; C3; B, T3, T6, N2, A1; P1, P2 (-śa-/sa-)
 ② *prāsāsamānā* C4; C5 (-sā-/śā-)
 ③ *prāsvāsamānā* N1, Pe; C1, C1; A2, A3; T8, P3; R, T9; T4, T5 (-svā-/śvā-)

①と②は、意味に大きな違いはないが、③は意味が異なる。

この仏語訳は以下のとおりである²¹。

Je vois aussi les Buddhas, ces lions parmi les rois des hommes, qui expliquent et qui exposent les lois, qui instruisent plusieurs kôṭis de créatures, qui font entendre leur voix dont le son est agréable.

下線部のチベット語訳は、*rab ston pa* である。したがって、ビュルヌフが③の P3 の読みを選ばず、①の意味に相当するチベット語訳を採用したことが分かる。ここは、①②③のどの読みを採用しても文意に不都合は生じないはずである。彼は、のちに R, P1, P2 も参照しているから、③の読みを採用することもできたはずである。ではなぜ、①の意味を選択したのだろうか。訳注 (notes) には彼の説明はない。

ケルンはこの箇所をつぎのように訳して²²、③の読みを採用している。

I see also the Buddhas, those lions of kings, revealing and showing the essence of the law, comforting many koṭis of creatures and emitting sweet-sounding voices.

これは英語訳の底本に使用したという①の C3 と②の C4²³ の読みではなく、③の R の読みである。さらにケルンは、下線部の語について脚注をつけているが²⁴、①③の異読しか挙げず、C4 にある②の読みを逸している。

また、校訂本のこの箇所の脚注は次のように訂正が必要である。

Kn 9, fn. 14)

prakāśa B. Ca. Cb. A. W. *prāśvāsa*. → *prāsāsa* Ca. Cb. *prakāśa* B. *prāśvāsa* A. K.

W は現時点で照合不能。校訂本の Ca. Cb. の混乱については、小槻 2007 (pp. xxvii–xxviii) を参照のこと。

サンプル 2 第 3 章 偈 123ab (Kn 95.7)

P3 は、この箇所をつぎのように読んでいる。(folio 55a1)

apratyanīyās ca bhavanti loke pūti mukhān teṣa pravāti gandhaḥ |

下線部分の異読は以下のとおりである。

① *nityam* D2; C3, C4, N1, Pe, A1; C5; C6, B, T2, T6, T7, N2, T3

② *gandhaḥ* A2, A3; T8, P3; C1, C2; R, T9; T4, T5; P1, P2

ここでは、紙写本の典型的な特徴が見られ、貝葉写本と紙写本がきれいに分かれる箇所である。貝葉写本は、*pūti* を名詞、紙写本は形容詞と解釈した結果が①と②の違いとなった。A1 と T3 は紙写本であるが、前述したように貝葉写本の忠実なコピーなので①の読みになった。T2 のコピーである P1, P2 の読みが①と同じでないのは、P1, P2 の書写生が紙写本の解釈に同調した結果と考えられる。

この仏語訳は以下のとおりである²⁵。

Ils sont, dans le monde, un objet d'aversion; leur bouche exhale une odeur fétide;

チベット語訳には、*rgyun* がみられる。紙写本の解釈でも問題がないので、ビュルヌフは P3 の読みを採用したと考えられる。*apratyanīyās* は難解な語であり、彼はチベット語訳を根拠として、*un objet d'aversion* と訳出している²⁶。ケルンはこの箇所を次のように訳し、脚注 2 でビュルヌフの解釈に異論を唱えている²⁷。

Nobody keeps their side; a putrid smell is continually issuing from their mouths;

サンプル 3 第 11 章 (Kn 249.4–6)

P3 は、この箇所をつぎのように読んでいる。(folio 135a4–5)

*atha khalu bhagavāṃ prabhūtaratnas tathāgato 'rhan samyaksambuddhaḥ siṃhāsanôpaviṣṭaḥ
paryāṅkam badhvā parisuddhag[r]ātro 'saṃghaṭitakāyo yathā samādhiṃ samāpannas tathā
sandrīyate sma |*

最初の下線の語の異読は以下のごとくである。

① *parisuddhagātro* (-śu-/-su-) C4; N2, A1; T2, P1, P2; N3, T8, P3; T3 (°yātro T6, °mātro N1, K)

② *parisusṣkagātro* C3, Pe; B, C6; C5; A2, A3; C1, C2; R, T9; T4, T5 (*parisvaska*° T7)²⁸

ビュルヌフは、これを *ayant les membres desséchés* と訳し、後にそれを訂正して、訳注で以下のように記している²⁹。

J'avais lu par erreur *pariçuchkagâtrô*, préoccupé malgré moi de l'idée de sauver au moins l'apparence du sens commun dans ces exhibitions fantastiques; mais tous les manuscrits donnant *pariçuddhagâtrô*, il faut traduire, « ayant les membres très-purs, » ou « parfaits, bien conformés, » selon le sens qu'a très-fréquemment *pariçuddha* dans ce livre.

訳注の l'apparence du sens commun dans ces exhibitions fantastiques が具体的にどういうことか筆者はよく理解できないが、彼は、一種の形象的な先入感をもってこの語を解釈したのではないかと考える。そして、実証は困難であるが、ビュルヌフは最初、P3 の読みに拠らずに、チベット語訳からのフランス語への重訳をそのままここに採用した可能性もあるのではないと思われる。なぜなら、これほどはっきりと書写された文字を彼ほどの人が *pariśuṣka*^o と読み誤る可能性は少ないと思うからである³⁰。彼がこの訳語を訂正した時に、その根拠とした写本は、P1, P2 であり、このことを、tous les manuscrits donnant *pariçuddhagâtrô* と記しているのである。しかし、R の読みは、*pariśuṣkagâtro* なので、その根拠が厳密に言えば正確ではなかったと言える。

ケルンは、ここを with emaciated limbs と訳し、脚注でビュルヌフの最初の訳が間違いではなかったと、つぎのように記している³¹。

Parisushkagâtra var. lect. parisuddha^o, with thoroughly pure or correct limbs. Burnouf had committed no mistake in reading parisushka^o, though he accuses himself of having done so.

彼は、P3 の読みを確認せず (確認していれば、脚注の下線部分は不要であった)、ビュルヌフの訳注の内容をそのまま受け入れて、下線部分を書いている。さらに、彼の英語訳の底本とした C3, C4³² のそれぞれの読みも一致しないので、C3 の読みを採用した根拠を説明すべきであった。仕方のないことであるが、ケルンはフランス語訳を必要以上に意識していたと思われる。

次に、*pariśuṣkagâtro* にアヴァグラハを付ける問題がある。上述のごとく、ネパール系写本にアヴァグラハが書かれたものは見あたらない。ビュルヌフもケルンもこの問題はまったく念頭になかった。戸田があえてアヴァグラハを付けたのは³³、中央アジア系写本 (カシュガル写本、ファルハードベグ写本) には *apariśuṣkagâtro* と書かれ³⁴、『正法華経』にも「肌色如故、亦不枯燥」 the colour of his body was as it always had been, not dried up at all と訳されている³⁵ことが、その根拠であると考えられる。筆者も前作で、*paryamka(m) badhvā 'pariśuṣkagâtro* とこれに従ったが³⁶、現在は、*pariśuṣkagâtro* とありのままにローマ字化しても、それはそれで一つの読み方であり、理解の仕方であり、不都合は生じないと判断している。チベット語訳は、注 28 のごとくネパール系②の読みに合う。ギルギット写本のこの箇所が欠落しているのは残念である。

二番目の下線部の 'samghatitakāyo には、次のごとき異読がある。

- ① 'saṃghaṭṭitakāyo C6 ('sañ-); N3, T8, P3; N1 (-ṭṭita-)
 ② saṃghaṭṭitakāyaḥ C3, Pe; A2, A3; C1, C2 (saṃghaṭṭikāya);
 R, T9; T4, T5; T2, P1, P2 (-kāyo)
 ③ saṃghaṭṭitakāyo C4; N2, T6, A1, T3 (-ṭṭita-)
 ④ saṃghaṭṭitakāyo C5
 ⑤ saṃghaṭṭitakāmo K
 ⑥ saṃharsṭitakāyo T7, B (-si-)

これらのうちで、④は③の、⑤は②の誤写と考えられる。また、⑥も誤伝か誤写であろう。したがって、異読は①, ②, ③に集約される。これは、(A) saṃghaṭṭ- / saṃghaṭṭ- と (B) アヴァグラハの有無という二つの論点に帰結する。

(A) saṃghaṭṭ- / saṃghaṭṭ-

saṃghaṭṭ- には、to assemble together, meet, collect, join, fasten together 等の意味があり、saṃghaṭṭita- の意味は assembled together となる³⁷。一方、saṃghaṭṭ- には、to strike, clasp, rub together, bring together, collect, assemble, meet 等の意味があり、saṃghaṭṭita- の意味は rubbed or struck together or against, kneaded, collected, assembled 等の意味で³⁸、これらの語は、それぞれ、下線部分の意味に近い。

エジャートンは、ケルン・南條本の読み、すなわち ③ の読みの saṃghaṭṭita- を prob. *shrunken, shrivelled (or possibly drawn in, contracted): . . . Tib. skum, drawn in, contracted, also paralyzed (Das);* と解説している³⁹。

この箇所に対応するチベット語 *skum gyos par* を *sku ma gyos par* と読むことができれば、the body not to be moved, the body not to be unsteady と訳すことも可能である⁴⁰。筆者はチベット語の専門家ではないので、識者のご教示を仰ぎたい。因みに『妙法蓮華経』の訳文は「全身不散」とあり、ハーヴィツはこれを his body whole and undecayed ワトソンは his body whole unimpaired と訳している⁴¹。この箇所をビュルヌフは sans que son corps eût diminué de volume, と訳し、ケルンは faint body と訳している⁴²。しかし、これらについての両者の訳注はない。

(B) アヴァグラハの有無について

この問題に関して筆者は、以下の事実を述べるにとどめたい。すなわち、戸田は、カシユガル写本のこの箇所を、'sa(m)ghaṭṭita°, ファルハードベーク写本で、asamgha(tt)ita°, と読み、辛嶋は、それらを、(')sa(m)ghaṭṭita°, [a]saṃ[ghat]i[ta]°, と読む。ファルハードベーク写本の両者の読みは同じではない⁴³が、否定の接頭辞 a- の存在を認めるという点で一致し、これはネパール系写本の上記 ① の読みと一致する。

注

1. 略号については、梵文法華經写本略号一覧を参照のこと。
2. これが *Le Lotus de la bonne loi*, Paris 1852である。この書には、緒言、訳文、訳注、付録 N° I-XXI および総索引が収められている。フランス語訳の完成と印刷出版までの経緯については、小槻 (2003, p. 251) 以下および戸田 (2001, 序 p. xxii) を参照のこと。
3. <http://www.aibl.fr/fr/asia/membres.html> による。
4. 小槻 (2003, p. 252ff.), (2007, 序 p. xxviff.) を参照。
5. セミコロンの区切られた写本類が一つのグループを形成する。これは、現段階での調査結果であり、完全無欠なものではないが、かなりの正確度が期待できる。今後、細部の変更、微調整、少数の例外の記述は当然あり得るが、現在のところ、グループ分けによる「グループ」の大枠を覆すほどの影響を与えるものでないことは確かである。
6. 戸田 (1980, p. 107), (1984, p. 144) を参照。
7. 戸田は、折々の論文でネパール系諸写本のグループ分けについて言及している。それらの記述が読者に断片的な印象しか与えていないことは事実であるが、記述内容の性格上やむを得ないものである。しかし、その内容は、一つひとつの写本を長い年月にわたって実際に読み込んだ者だけに可能な、テキスト上の具体的な指摘である。戸田 (1984, p. 142) (1997, p. 16) 等を参照。グループ分けについて、より詳細な理解を望まれる方は、1999-2002年に発表された戸田の研究成果を参照・熟読されたい。
8. 「R系」と同様に、戸田が編者との勉強会でよく口にした言葉である。小槻 (2007, p. xxix) を参照。
9. 湯山 (1970, p. 12ff.), Vogel (1974) および小槻 (2007, pp. xxix-xxx) に拠った。なお、小槻 (2007, pp. xxix) では、*samvat* 923 (西暦1802/1803年頃) と記述したが、本稿の如く改める。
10. ただし、すべての箇所ですべて完全に合致するわけではない。小槻 (2007, pp. xxix) の Kn 48.11 (68ab) はその一例である。
11. ただし、序品では、N3 と T8 は合致していない。
12. 水船 (1992), 戸田 (1996, p. 140, 1997a) を参照。
13. ここから鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「提婆達多品」相当部分が始まる。
14. T8 の読みは、提婆品相当部分以後も N3 の読みと一致する。P3 が (N3, T8) の読みから (A2, A3) の読みへ替わる理由は今のところ不明である。
15. 戸田 (1996, p. 115) を参照。一般的にすべての写本に言えることであるが、序品は、フォリオの散逸と補充による出入りが他の章よりもはるかに頻繁で、その結果、それらの系統も錯綜して複雑である。ゆえに、序品の読みを分析した結果のみに頼って、写本全体のグループ分けを予測するのは軽率である。
16. 小槻 (2007, p. xxvi ff.) を参照。

17. 戸田 (2000a, p. 63) を参照。
18. 戸田 (2000, pp. 363–362 [pp. (1)–(2)]) を参照。
19. 貝葉写本と紙写本の書写時期には約4世紀の空白があることも考慮しなければならない。
20. 本稿の脚注 2 と共に、湯山 (1994, p. 65ff.), (2000, p. 61ff.) も参照のこと。
21. Burnouf (1852, p.6).
22. Kern (1884, p. 10).
23. Ibid. (p. xxxviii).
24. Ibid. (p. 10, fn. 2).
25. Burnouf (1852, p. 60). フランス語訳のこの偈の番号は117になっているが、実際は123である。
26. Ibid. (p. 323), BHSD (p. 48).
27. Kern (1884, p. 94, p. 17, fn. 2).
28. チベット語訳は、*sku kun bskams shing* で、ネパール系②の読みに合う。
29. Burnouf (1852, p. 401).
30. 訳注の下線部分のように、*parisuddha*^o と書かれている他の箇所を見ても、今問題としている 135a4–5 の箇所の字形とそっくりなので、誤読の確率は低いと思う。cf. 11a2, 11b4, 38b4, 83a6, 83b4, 84b2, 104a5, etc.
31. Kern (1884, p. 236, fn.2).
32. Ibid. (p. xxxviii).
33. 戸田 (1993, pp. 179–180).
34. 戸田 (1981, pp. 123, 230) 辛嶋・Wille (2006, p. 160).
35. 辛嶋 (1992, pp. 149–150).
36. 小槻 (2007, p. 120, 90b1).
37. Monier (1899, p. 1130).
38. Ibid., 戸田 (2002, pp. 69–70).
39. BHSD (p. 549), Das (1902, p. 92).
40. Jäschke (1881, p. 519), Das (1902, p. 1156).
41. Hurvitz (1976, p. 187), Watson (1993, p. 175).
42. Burnouf (1852, p.151), Kern (1884, p. 236).
43. 戸田 (1981, pp. 123, 230), 辛嶋・Wille (2006, p. 160).